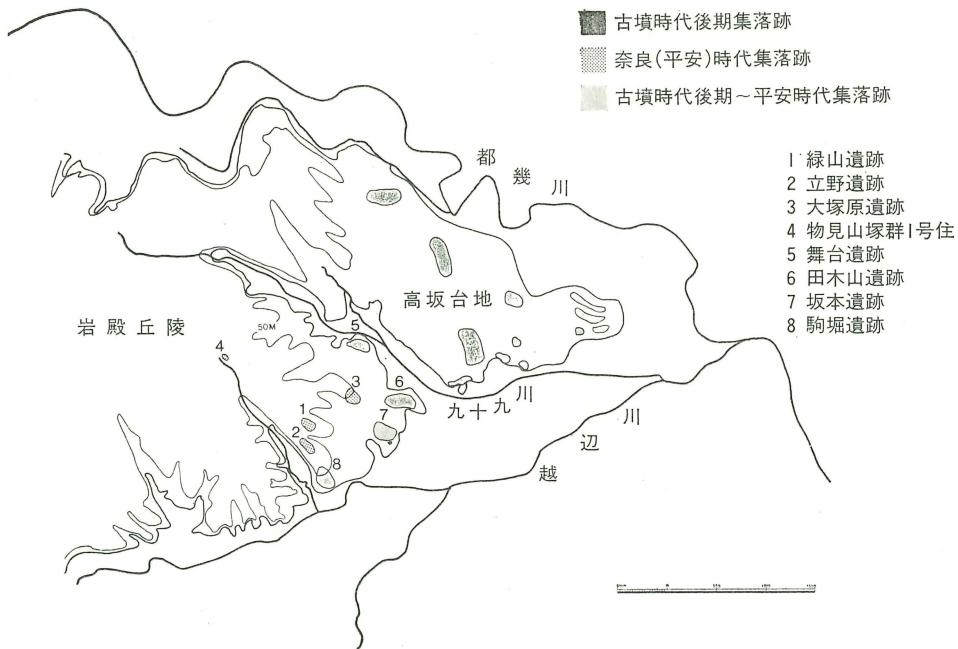


## 緑山遺跡の性格と周辺の集落について

本遺跡で発見された古墳時代以降の住居跡は6基で、古い順に記すと、五領期の4号住居跡→鬼高期の5号住居跡→真間期の6~9号住居跡である。4号住居跡は出土遺物も少なく、柱穴・炉の位置も不規則である。いわゆる田木台地（註1）における該期の遺跡には、駒堀遺跡（註2）、根平遺跡（註3）があるが、何れも小規模な集落である。5号住居跡は上面に6号住居跡が構築されていたため遺存状態は悪いが、出土遺物はその割に多く土師器の他に須恵器壊や金環が出土している。須恵器壊は一点で、その形態から7世紀前半と考えられる。又、住居跡からの金環の出土例には、番清水遺跡（註4）や寺谷遺跡（註5）があり、寺谷遺跡については羽尾窯跡との関係が指摘されている。（註6）この中で金環について「金環の出土も須恵器工人の社会的地位を考えれば、決して不釣合の現象ではない」と述べられているが、本遺跡5号住居跡は出土須恵器も1点であるから短絡的に須恵器生産との関係を云々はできないが、後述する次期集落の問題もあり看過することはできない。

6~9号住居跡は出土遺物が少ないが、従来の真間期の範疇でとらえられるものである。この4基の住居跡のうち7号と8号住居跡については、一般的な住居の形態を示しておらず、7号住居跡は東壁に楕円形の張出し部を持ち、カマドの東には長大な貯蔵穴様の土壙がある。8号住居跡については、該期の住居には基本的に付設されているはずのカマドが検出されておらず、北面コーナーには焼土が、南東コーナーには灰白色粘土が堆積していた。又、6号、8号、9号住居跡からは瓦が出土しており、住居形態と共に一般集落とは様相を異にしていることが伺える。



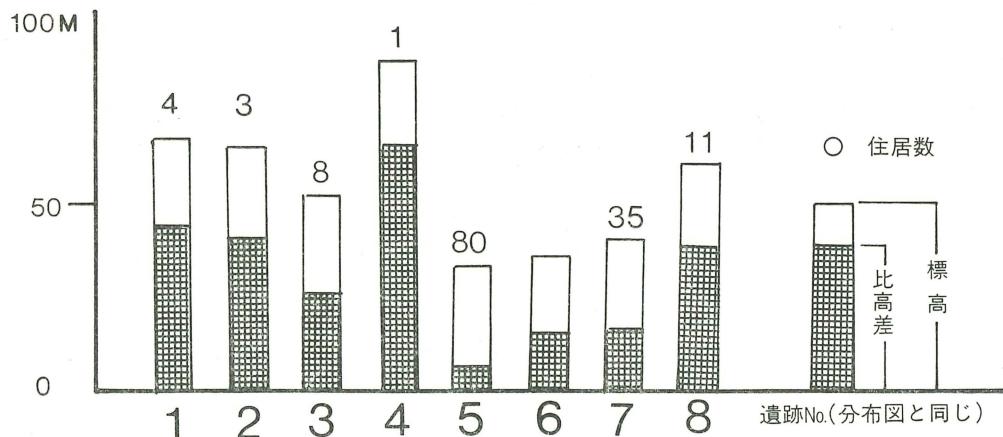
第121図 高坂丘陵の古墳時代後期～奈良・平安時代集落分布図

さて、次に高坂丘陵における古墳時代後期から奈良、平安時代の集落の立地と分布について見てみたい。ここでいう高坂丘陵とは、岩殿丘陵の東側とそれに続く高坂台地のことである。この地域の調査例は多く、特に岩殿丘陵東端と田木台地においては、本遺跡の調査原因でもある住宅都市整備公団の区画整理事業や関越自動車道建設、県立こども動物自然公園建設等により調査密度は非常に高い。一地域の調査密度という点では県内でも最も高い地域の一つであろう。

九十九川を挟んだ高坂台地の南側の田木台地と岩殿丘陵の南端地域は、物見山から多くの尾根が八ツ手状に伸びており、平坦面は少なく尾根と谷があり組んだ複雑な地形になっている。尾根上には各時代の集落や古墳、塚群等があり、斜面には須恵器、埴輪窯が構築されている。越辺川を臨む駒堀遺跡や立野遺跡（註7）からは関東平野を一望することができ、関越自動車道が南へ向って走っている様子が良くわかる。入間郡衙の可能性を指摘されている若葉台遺跡（註8）や脚折遺跡（註9）等の奈良・平安時代の集落を間近に見ることができ、当時はカマドの煙の数さえ数えることができたであろう。

高坂丘陵の古墳時代後期から奈良・平安時代の集落の分布は分布図のとおりであるが、高坂台地については古墳時代の集落の数が多く煩雑になるので、調査が実施されたものと大きなものを図示したものである。田木台地については田木山遺跡（註10）以外は調査が実施されている。分布図を見ると、古墳時代の集落の数に比して奈良・平安時代の集落の数が非常に少ないことが一目でわかる。特に高坂台地においては、その差は極端である。このような現象についてはすでに指摘されていることだが（註11）、居住地域や住居形態の変化だけでなく、そこには人口減少という面もあると思われる。

田木台地では、これまでに8ヶ所の集落が調査、確認されており、鬼高期のものには、舞台遺跡（註12）、駒堀遺跡、坂本遺跡（註13）、田木山遺跡があり、真間期のものには、大塚原遺跡（註14）、立野遺跡、緑山遺跡、そして時期的にはやや新しくなるが物見山塚群1号住居跡（註15）がある。これらのうち、鬼高期から真間期へと継続する集落は坂本遺跡だけである。（田木山遺跡の集落部分は未調査の為不明）舞台遺跡は最も大きな集落であり、鬼高期の中でも幅を持って存在し



第122図 遺跡の標高と沖積面との比高差

ている。

これらの田木台地の鬼高期の集落は、何れも沖積地を臨む台地の縁辺部に立地しており、標高も駒堀遺跡の60mを除いて、30~40m以内にある。これに対して、真間期の集落は台地奥部というより丘陵部の尾根上に立地するようになり、標高を見ても50m以上になる。そして、舞台遺跡のような大きな集落はなくなり、数基の住居跡からなる小規模な集落へと変化している。特に物見山塚群1号住居跡のように、標高90m程の馬の背状の尾根に1基だけ存在するような例も出てくる。両期の集落規模、標高、水田面との比高差の比較は表のとおりである。

以上のような現象は、7世紀末から8世紀初めにかけて集落立地に関わる規制が存在したことが想像でき、標高50m以上で水田面との比高差も大きい台地奥部に住居を築く姿は、水田経営以外に集落占地の要因を求めることができるのでないだろうか。このことは、緑山遺跡や立野遺跡の住居規模、構造や出土遺物からも、一般集落とは趣を異にした様相を看取することができる。立野遺跡については、「須恵器生産に関連した工房や選別所的な性格を持つ可能性があるが……」(註16)という指摘が既になされているが、緑山遺跡についても、瓦の出土やカマドのない住居跡の存在は窯業に関連する遺跡であると考えることができる。立野遺跡と緑山遺跡という谷を挟んで200m程の距離に存在する特異な集落は、時期的にも近く、有機的な関連性を持っていたに違いない。しかし立野遺跡の東にはまだかなりの平坦面があるにもかかわらず、谷という自然の区画を利用している点は、両集落の性格の違いを感じさせる。このことは、立野遺跡の須恵器、緑山遺跡の瓦という出土遺物の点からもいえる。

緑山遺跡・立野遺跡から尾根伝いに西へ向うと、3km程で8世紀~10世紀の一大窯業地帯である鳩山窯址群がある。又、東の田木台地の桜山窯址群(註17)、根平遺跡、舞台遺跡では6世紀中葉~7世紀後半の須恵器窯址と埴輪窯址が調査されている。このような窯業地帯の中において緑山・立野遺跡の性格を窯業生産に結びつけることは然程無理な事ではないであろう。しかし、田木台地の諸窯址とは時期的な差があり、鳩山窯址群とは距離的な差があるという問題が残る。そこで、岩殿丘陵に7世紀末から8世紀初頭の窯址の存在を考えることもできるが、住宅都市整備公団の用地内においては、可能性のある谷にはトレンチによる確認調査を実施しており、その結果窯址は発見されなかった。今後この地域において、新たな窯址が発見される可能性は充分残されているが、これまでの調査からも、より鳩山窯址群に近い地域の可能性が強いであろう。

以上のことを簡単にまとめてみよう。

古墳時代の高坂丘陵には多くの集落と古墳群、そして窯址群があり、その繁栄ぶりが伺えるが、7世紀後半以降には台地奥部に小集落が点在するだけになる。このうち、緑山遺跡・立野遺跡からは瓦・須恵器の出土が顕著であり、住居規模や構造の面においても一般集落とは異なる様相を呈している。このような集落立地の推移の背景には、窯業生産が大きな位置を占めていたことは想像に難くない。

高坂周辺は比企郡都家郷に比定されるというが、本報告第V章でも述べられているとおり、緑山遺跡からは勝呂廃寺(註18)と同じ瓦が出土している。勝呂廃寺は入間郡衙の可能性を指摘されている若葉台遺跡と近い関係にあり、緑山遺跡を含めた高坂丘陵の遺跡群と入間郡との関係も改めて

問題にする必要があるだろう。

これまで、緑山遺跡とその周辺の関連する遺跡について立地と分布を中心に見てきたが、主に田木台地という狭い範囲に限った上、古墳群や寺院跡との関係についても述べられなかった。今回触れられなかつたこの地域の鬼高末～真間期の土器の編年研究も含めて今後の課題としたい。

(井上尚明)

註

註1 小久保徹・利根川章彦「桜山古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981 の第Ⅱ章遺跡の立地と環境によつた。

註2 栗原文蔵・谷井彪他「駒堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会 昭和49年

註3 水村孝行他「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会 昭和55年

註4 金井塚良一「番清水遺跡」考古学資料刊行会 1968年

註5 金井塚良一「埼玉県比企郡寺谷遺跡」『日本考古学年報』12 1959年

註6 高橋一夫他「羽尾窯跡発掘調査報告書」滑川村教育委員会 1980年

註7 水村孝行他「児沢・立野・大塚原」埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会 昭和55年

註8 玉利秀雄他「若葉台遺跡」第一次～第四次発掘調査概報 鶴ヶ島町教育委員会

註9 利秀雄他「脚折遺跡群」鶴ヶ島町教育委員会 1981年

註10 栗原文蔵他「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 昭和49年は集落部分ではなく古墳の調査である。

註11 「東松山市史」資料編第一巻 東松山市 昭和56年

註12 井上肇他「舞台」(資料編・本文編) 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17・18集 埼玉県教育委員会

註13 昭和53～54年に東松山市教育委員会調査。渡辺久生氏より御教示。住居数43基の内鬼高期のものが35～36基程であるが、整理中であるため確実な数ではない。

註14 註7と同じ

註15 水村孝行他「物見山塚群」埼玉県遺跡発掘調査報告書第24集 埼玉県教育委員会 昭和55年

註16 註7参照

註17 水村孝行他「桜山窯跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982年

註18 田中一郎他「勝呂廃寺」坂戸市教育委員会 1981年